

6 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8

官 刻 孝 義 錄

卷 八

篋 前 下

口 9
1596
44





孝義錄卷之四十四

筑前國下

孝行者熟焉湯

■博多の湖上町小毛の細屋熟焉湯と父母に
供へて孝行たり日たゞに福岡よりあむをうそ
て細々とおもひをたゞさうと私利をもうり出て
親の衣食をうらせやうつねよおどちをす
とくおもひておこぬつきはりともを安産く
たる事ありそれと父母のじとくいふをうれ
うれちくまいかをあらそみ紫をよにせ

次家貧く一あト教ふ事と報小ハ多とも波
打を無くあつやうと反を流すおゆと冬は
家代もへたとてあくまでも此の事より母と弟せ
く車なく先地をりこよれもかうと車して往く
經年月乃女八日こよれ月家賃をむき弘治年月
あくまでも錢の数を行ひたゞくとも折りをひ
ふくても自をもつてある事あり考に、每を病ども
乃とん安くせ候る事ある事候り家主はけよとハ
かまするもと親めとそこと見當を文内と之
誕生れつとはいぬくつてら縁津兄々をこまひ

にあくまでもくら小る極本とを賣つ後も高と
もあくまでも熱き傷うりと小苦ひとせ母へてて詫
毛くもきとととよけく兄弟のあくらひ引ま
く引けくと身自効とくと町乃人二入二人
うちつもひつ病をもれ西有小熱き傷傷よびて
あくまでも文内ハ見にくるとされまし今宵も
既痛しててく病よくひかとひく熱き傷いか
くもくもひくもかくもくも海を底とじてと
を先り次あくまでもつまつとくとくとくとくとく

出りつゝ後も又文内もとめ志すや感へ乞ひ候
兄へうそて勤めけつまくも熱き湯、折ひのを
くわくうもせめんと在らむか小ちう親み徳と
も暖へまくらしもれも享保十度の反らかう
領主にまえし御よ弟ともとあへて寝た
せうあ親もまくら候あひろあキうに我家の使
へとく町年寄代盡とうを町うちの人をお
つゞへ酒肴をまくあてりぬるもく又熱き湯ア
ソヒシムと汝孝いはゆくより人多き市中に
ておこうと吾乃賜をうけよとく坐てまくら

今小ちよとあうとよとて済をふうへあねひとれ
魚を捕らう奉行内事とじらうと全く親みいとまう
深く恩をあはざまうとく教すも行うありとく親す
たとく日儀のひつ御はくらひがましる事あもかく
と深切うせふえをる

孝行者八年

八年ハ福岡乃城下組金町の番人たり父を尾上而立場
ことひくまち福岡の家士つぐく身を終ぬ八年は
父をかく後主人のひと身とぞううハ母と妻ふく成
奥へあおだ郡八反田村生れうとぞうていとくか高ひ

をまちうおつ火炎にあひて向へ船内平尾村
うはう下位にて人の田畠と耕しもむきを後づりと
もぬれと熱れ病もやうて母も妻ふもそんあよと
うもとよかあるもよう次も定められしはやう
て病のうらうれはゆきとて年ひへ友田村よりう
とふとよかふ家士乃からふうとこまくら
まわせ給ふよて家族を育むやゆく様ふつよ
がみ奉ふとも金うち重ねよかくと人の聲ゆひうつ
やまとそれ事と業とてもれともひもアとくま
うへに又火をよかづき身のをとふとくま

まへ洗ふとさうじこゝもあら番屋には漆番とて
の番あらうり一ひもこうじひ本ふとあれど番屋にせ
まくして母子徳とも寝てまなきととのまとり先
夜の宿もゆきつゆれ軒乃トたまことに番が明る
きとありやうじゆるすもあくひと又番屋とも蚊
帳をつぶしとおなげとへ母北枕りと小蚊とくひは
そ起ぬけう母辛とゆきしやくよかく貢と中に
を冬至乃あひて日下小袖とくろ又支の袴
麦さうれやくもと審うるも是も角こくよま
うきとねよへ母子の費をつとひとからて或附今

うちもうれニ品とあらうくお車かうれとひ出しき革と
一二筋よりまう麦さうりハ笠下とく高人のよう
そつむとちひうまれハまセか費をあらすとい川
もとて母りんとあんうう父のちうせとまふせう
か私家士のまは母れちふくまくまもくるより
しりああれはまうお髪ゆつととめせ次金と
さゆとあめうされお髪ゆつととめせ次金と
よとひく母とあらうに寒へぬまきまくと風化
程もあらうほらんいうてうそひまくとまくと

ひへて母乃つまゆをうそとお孝行のくれたる
ノは向こう二年三月頃より某せとまくふみ
まへて寝そしむき

孝行者鞍崎加右衛門

孝行者太郎

鞍崎加右衛門ハ夜漁船其本宿にとどき代々土器を能りて
產業としてかま房うふとすとびまれつゝ正直すと
親小は人あを孝うつてけよじう親のそへ
にとひと人とあうて極家貰へく母ゆを養ふ
と又とて衣食れどりきとあらんと先と附

うてぬこ求じるやあときや人の安どめうきてとれ
をあせう夜あられ麻布と冬はらきうかう友
も涼しきかゆもんまうけくよく称ゆどうまくと
ま側ともととくわくまきを荷ひくをと
ゆだ式をあくとひうる衣ゆあくりふ財と文代称
あらまねうらハ行されとおほくもと慰うつ
ゆと人ぬ是難をつむに此山の京多或ハむく今北
車を控りとせんとけくよ夜あくハ之の左右
ううへぬてたゞの衣乃つまつとまととく

事をりりとあひ父の解とねむかと云價のとわ
うきと常う二と合ひ襦袢と布の袋にと縫ひの
うゆゆひそくふくてもいひをつけて調へす
めを後父の病室うつ附人參を用ひてんじた
おとこあらわらうんとあらひの見れどもと
まこと西へえ終ひ絶をおびへつまひよ葉うれ
店の主もがむる孝心あらめうらあそひはうめ
ふとつもとおなづしてう一絶の身みとゆうけ
まつまわゆうりへ價とうも結つとあるを葉を
うけうめひとえをねまを金ひとくはれをと

く絶とうやうへゆく粉うて股とうもとある
うとあくあね小うせぬこまうれをあきともうと
墓ふ活く水とよ向香死をさくたる牛一日とと
そくはきあん死かけ父の死絶へあくと並
なく解圍ふとく御へつておは靈布と茶湯と
あくと圓心圓心はおふとくは仕事ともうと
もあくとく後も数年のあひて嫁り娘とも喰蔬菜と
のくらひく魚も肉をうちまへ靈あうと年次
はくとく出うつも入うまくし生まじつとくとく
ううとく父の追福といのくしと先法義經

を書き写さんと思ひまぢへと富貴くて料紙を求
ふ事あるも小ゆゑどもまことに隣にそぞら醫師板田
某があくてものへまへ業袖入へきといひて、まへ
加布良もと小よろこびして安長寺の前野住持徳巌
さんへ詔経を書写すも、まへに徳巌を彼ほう考
心り切らるゝは感へりあつまへけり數月を経て
かしこ終り、かちきハモの書写せ方を歎くこそ
がく聖業集ふくとあはと考うと考うと經経と
あへへ某にちと年比經行くとと成らむとく
主思をもひひきれ或附考すは傳くゆりけふ

又其木うち十町みずうと東石の鶴こよ五毛金銀入
そ教皇紙袋ともうへば、又加布良も定めく表
に登る人のおぐいたるもくん追引てまくまとふ
よなほせせんおおきのわよ志をひくもくじ
さかはまもおとひのひくをと山外の名と有
ざとあはへては地にれを立五毛人必有せし人の名
称あらへとひく少財金銀をもとまし山外と有
内ねうくめとひく少財金銀をもとまし山外と有
もとて帝釈寺跡とソホの旅宿をゆきまく
あざく人のソホはうらは全一あた分ふくすの

銀をつと金をかども書つておき大切され
それをくふかへされても又うれまなくがくふくめと
取次もあらぬとあり候ふ志あくとすもうせりあり
それ入をめのむらゆきとひびくからまへ
金銀を金まんまくあう是あくおまくさんを
らうにうるの多さるをへ旅宿の主乃ちくひ
そそくは銀もくもうけきとひもとどんくも
うそく立ちさせたて酒など勧めんとく神代も入
てぞぞくに我ち生れゆく下タテふれハ御とゆくうそ
ゆう控てゆうけう又妹マミと小病コトコトなる事ハシマ

主へ迎えとぞうせんと食料などと荷アへりおまく
そそくねをうくおこくおこなふやまくとくとえける
主と絶一本村とつぶの人の田地とううやくまくとく
く耕作せううの主と齋地セイチと年ハサウエとを貢納す
やうと主と主と車の主と塔主ハタスもかくとせえ
先清アホく貢をの納先ハタスとむかひの時地主の
やう利潤もうと廢田を辛苦ハラハラして耕ほすすいと
然おととお称ハシマしと作らざる事ハシマふう父によ相
乃候とそそくぬる事ハシマとし我辛苦ハラハラ
久つとくとそそく父死ハシマあはめまばせと乃

田地を耕作して秋乃彼屋の中日と小はそれ新茶
とを多くうつてはおと車うして母に送りうきと
うちハ隣をとどけてほり父もあくまでも経て見
か右馬をう金まつと父乃工くうきと見えもあく彼と
娘のとくをうああくれ先妹うむじニ親のゆ
せきゆうりひつもくりうやくより母よつれん
も立らぬとたきぬかるくみつうるニ支して
くらむをうおぬすりともくきがまちもようり
まれ、妻トウカとのもしゆの多く親妹多く
嫁へあきと父のきてたのうきくもとうき人父終

見て後見るのをうして流おう人とひどりあ
きお半ハキモテうけじうきらる程よ彼おうじひ
因く村くよ及びあくの村くキモテヌ及ぶ
ひ傳へてあくあれハ所乃役人を感して家乃
破りうると修復せしとく家乃こくはあく
乞と頼りすあくとおちきハ改り作アシテとく
解くうきをとれまうれんと役人うの賜物を
おもと修理せり、折う上を父おもめううとく
古行本と用の父のけう金へたとよまき

杖と伐木棒あるひもして家へもうそりてゐる。父の
いけるとき歿帳のちうりし死しての後をうへにそ
のひきと二般の位牌と歿帳のうちによく見ゆ徳
とく生き事にそめと教すと悔かげと親のつね
さうりぬあらとおぼれもとく用ひうき
かくし後ふの役人があらそあらううとすむから
うれひに感してまらまくとくせうか孝ひの源
さとうとく心をく清美は人とそとをひ
ぬくすら大至て主の教さんとせーと情くちく
向むく是も彼う志ア化ーあるやま後とく

ふうとくこそつ称く領主をう金まくらふと城を
あこみて跡すもくと役戻をきうたも出縫をも
會ひ中う財をだつゝと人う先ふあきめく経よ
つ年は領主にちえされも享保十六年とりすよ無成
あくても行ひを復原せり

兄弟睦者忠太郎

兄弟睦者清次郎

忠太郎ハ志摩郡遙田村百姓すと才を清次郎とす
新田村小うほつす先う父の附う耕漁を業と田
島主十町あゆうとお傳へて下つて男男女多く牛馬

をもあまこおう兄は十七才も十二歳もふきる時父乃
ウツの出てあくも年の七月うちへうとひまにのぞみ
て我せ代去後も二人ともにひとりそせく家業と耕
作と小心を用ひ度貞又と公役へ勤怠は親族小
睦くおつよ者とあそれむへく常に先祖の恩徳を
ほしきを承認をこうじにちかへとひがへる
やうあめ母も病日ゆくてま次の年死をくほと父の
遺言を忘るあくとひまく經年波あるあ祝の云紫
とかくちう向く十九は十六某代名りぬういしの直承
をつと次第業目移力と至して田島とむらを

魚人とおうてちたうは妻をひく高めとむちう
と田島とむらまくみてかとあひと耕と貞ねとまくを
ふも先せ乃魚とく家にむともあそび川めと又
志うせう經年目く小用う敷金銀足財あくもいつと
うあとつまうなう熱太郎ち男ふくらむ娘ひくらむ
えれも向くの貝塚村う母の親族を算収子とあ
多成新吉とひま清次彦は男ふ二人あうて先を熱次郎
すと孫太郎とひまかくあむ向く村の市の店舗孙七と
ふりのふと孫とふとまれうへに年こうあうとひく
く五つまうかくは孫を子を養ふとひく

清次卿少と力と筋くよどひ入へとかく群
うけりもかくしに先乃越太卿深く御せう艱難と思ふ
さうしておまこねうとせ貞船のちひきをほくのひな役など
をもけりと清次卿めをじておぐらひてはヰア
そのをとかくへおせと隱居をぬき後まくの先方
叙文甥田比家財とつこむしてつもくまゆるも行つく
がま下教をあまくもておがくもとすうつ、病多
く或も年老くおまことなくめぬ者あれハ故に昔も
立てあつまてゆく向く村小年貢をあくちうの又を
もれもひよ役をふと若あとて力とあくせく助も

けり是みか父母の遺言とありおとづれと早もじう生
質のそくれそくらなまく

貞蔵者さん

里ん古ねぢ御薬院出の民六助う娘もうとく人に
はう人あく勤うやは主人をあらきまそくくへて助
こうえんの小娘やうひ相物ハとくにれ畠とくくつ六
人にやうまれかくしてせばよもやうしうまとくと氣ら
らく酒をくらぶ解きふじて日にりんをせんへ罵り
おもへんかとせうとまむとおもへばうと事かく
頼みとやうけ支にとくサク支からむすとぬる

以ておもて湯をわく食と酒しておへ支ゆつて
ゆくものもあつてあれハ勢うちらたら例へうちそく
そよそよそれといらうとむらうするまことにとれどもあ
それよりかは感へあひ親族の者とお狠苦と
おもじものと縁をつてソムよは盡つてつす
一そむ人お家は織つて支乃まくらふともう
出ぬともうあとくましれえ享保ナセま机壁にて
民一日の食をとたゞうるすまうへ相妙妻とや
くまよたてちうとく通かへぬ男ふ一人女ふ二三人う
う肺強ハ人お家につづくを次もう娘を携へま

角の田主がりとくにえうし小ちうづくと主人支ぬひすて
いさぎあるの夫婦はほくへし相助を病くうを思ふ
年もあされハ又うの富にゆきくとくへ支の葬れ
ふをいふからとくもひとく今主人お父母乃
まうふを夜ばらく相助をめにあうし付う月とれ
志日の前日に坐寺よゆなく墓と拂ひそよ先あく教
日ごく宿て花をそなへとそじけ一月うて
意くに或と終日安奉車にすこして善く及ぶとくを
望み事か今り主人の家はまう多大行文と承勅と
うらむと主人を感へあへてアシマのゆくとく

てむうるりくみえみうちとよくかくねを再娘
せきく夢んうと親族乃そめうしわぬくらひてし
きはきと三人の並じあつても心ひまわせくきて
男小をほくよお二入の娘を母に似あうもろみ
やうく男子はうせゆ父乃おとく島ばうらつまみ
高くもやをとりもうとを

孝行者儀ニ次

後、三浦と福波村内佐村乃文七と男おうま保十と年
二十歳ゆと同じ船九郎丸村の百姓を本業とす者乃
岩手とよしほと馬川とやくと兄の娘と夫の

年と娘ニ次年先ありとくとあじ家よりをと
称そうし供三次人とをうえふすく水皆父母う孝
ある事頗ひす一若母の母は同じ船中佐村よすう
兵山郷うりと小屋とよ居とくと月に十七日とおき
島うせすうハ我家ノリむうへアキモ吉育きう
りとくると飯食く往后も度々うねと別居をつむじふ
ますけもふきとらをうあ我家代もへとあつひてお
ゆふとちうつうふをめどと萬代おおまきあ
娘をわくれおとくてお夕乃食すハとあうからくと
ちく坐うと祖父母まこと病多くして行歩もあ

ぬまつしゅゆくのよもじゆをとふとよ
とふ候と次へおひあらきくとお往來といたとけ
あれ去年の暮れ迄より祖母の病をうて起牀との
ゆくらまつと父母と妻と私とおまかせ候む
して父抱ぢりおも耕作日々おまかせ候む
立つて無事候ども或も葉とおまかせ候む
常をとお次とおもじに丸床にて身のうらと
おまかせ候まつておもすすめくお含めと
おねじり遂に年をうり祖母のとおも元文
五年代長とおもじりおまかせのとおも葉と又年光る

去まつて氣をくよもじゆをとまゆと居つまつ候
二度う耕作ろたとけもなぐりぬまふとあやぐれ
ひよみと後二度とまく爲父の農業年力を
まへ由とおまかせ候むとまくおまかせ候
おまかせ候むとまくおまかせ候むとまくおまかせ
とおまかせ候むとまくおまかせ候むとまくおまかせ
おまかせ候むとまくおまかせ候むとまくおまかせ
おまかせ候むとまくおまかせ候むとまくおまかせ

とまおい病にさへかゝらぬあれば在る酒など
のこなびにく氣を教へあらざるもを猶もくげき
けもかうの貴すらじとをもむらうとくらうゆ
を求り来るものと下にくまう父はおはく
て終日乃耕作のほととをよそとせんふとひつて家
内あつともひ酒くまくして又の飲ひをほくあり
を雇く田島乃ておもむきにまわるの事にと
あまたをのれとすゑ父れ云葉母もとひ出づふ
つも入アヤー祖母乃世ふありくやもと又やくせ
う先くしての後ちとお靈若年まとつてて又あらせ

うとをかまてはよむ心にあくありくもとゆり
あくくはくとくとくの親跡とふくとあくと睡ひ
公役をほくしむくとお役にあくらむといた
易近事へ人にゆづとのまきりとあるとのとて
勤らげう妻も支と因くぬ失をすら生貰て
舅姑に孝養やくと村あくとまくやまくとくとく
うはくゆれ風俗とくひくとくとくとくとくとく
とくとくの底をとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

をうき

奇物者友也

遠賀郡木舟村の百姓友也と八町田隣九畠あまう代
田島をもじらむれもじものひこうありて私生貿易温習
して恩讐とまんく親小孝善らしく常口妻ふ
不欲とくもかねむ金きらを恐り罵声ふく／＼
並べてせんかまよう農業に身を以て称農業とた
ども／＼経年とあつちたうりひよく貢物ハ村うち
先そらておさち施設もそ松財とく小をとたくに年
若紀者とみるとい小ハ國乃接りすむとあう村乃
役人の数へをちり農業にんとま／＼とて津義

ともす／＼あがく／＼もくちひ營む／＼など
といはえず／＼田島にはを移して名をもく人
をもくとふくらやあ／＼き／＼か／＼ひ／＼作業と
い／＼くじへ／＼とひ／＼心内被ふ／＼もと／＼と
是をもくとくれ母とく家代とくもく
別家とく／＼農事せり／＼あふはくと益々
なくとく側をもくれそよ／＼は世中のるすと
か／＼慰め／＼ソ称す／＼妹は嫁をじ／＼と
出立とく／＼き家代りて故とく／＼かお私
すれ／＼田島或と下敷の男女馬牛にまうまく

國にあらへてまづわづら又せんとしの算小
そとくぬ農夫をすくはれ二年六畳の附より
組改をつゝ先に享保十七年こそよ生中稻虫の
足きりひまむと不化もくと小民を今日とよも
じへもむかうへよもくに發作
を費と捨て候とくのへる金村といふとよ組治
とほとあまへれ歎をうそふ小民小切のく
て巣葛の根をわらとふお妻ふ活立ふよ組
をくわくわ君のとくひの玉へふとカとくへて机を
すとけぬ賊用とほとくのと衣食とおれ

事にあらまといふお書かく朋友乃丈を尊く
人の畜凶をせよと我身せよとひまく常く
いけると教とすたゞきあくふと賄う付くと
不ふふらやう魄蛤乃敷ひとと家あらうてく
さううとお作延享元年とりと組改の法とくと
聲にゆつま宝曆二年九月とつよとおれひと作
ゆふりのまくは領主とうに寝起の事とくとくやく
奉行考甚み

甚五は糟屋郡若狭村百姓うち父と清七とつう
ちうとお妻をうれ比男を志三郎とつよとく成

生て経たくらせめうは又妻とじつて男ふ二人を
うなぐ兄は夫の基五ふく身を太化とそつひる
基ふう母生貨人ふきれてむろん金くへ縫ふふ
き縫と吉ぬと縫は深切う衣被を製しゆふ
ゆふと吉縫はつ縫は新きもととくらべ二人の
夫ふにちそのあしたふととさきけつ田地二段ふ畠
とりもり支活七百ゆうりし後ち家ととけ一段五
畠を基吉縫うあくのこん一段ととみをとて耕さ
しもとづれはうれまに年かもう基五切とくら
年生にして孝ひやく農業はわ成まし國風と

もとと貢おを納ふすやう小村役とを候うに
せども無乃餘ともぬ半領とねども田畠半出或と行
細工をやうぬまうかくこうと奉ともうれども恩
色の心ぬくしてあくと立つて安否ととひ丈
馬は辯をよするもきくとみ側はあくとよどと
おととくわらひの方じみ事と續けてよくとぬせ
食物ふく私金あれとぞく細工とそくうと多くに
老をとお母とおとぞくひくとぞくうとぞく
おとれかひきれよゆく次第じとくといはう付
見基三席或ハとくとくうの狀と人に當ち乃

事と相合ひのまことに商をつゝむといふよ
あく母のもとよりおとせうそれも附にいぢれん
ておとと申すが六年ばかりお母を計はりの
あくひそよめけんそれも基みとどめくしてあく
ひそよめはをと始つけるとおや次第太化六
農家につくへりを終るにゆく母のまひよや
用ゆるるをつく唯太化農業化たとくとある
げふくをとく、明和四年五月終るもとをと
くと舊をせり

奇物者考七

鞍馬郡柱木村乃考七十有六町二匁あきう北畠島とお
寺を教百姓たちを寶暦二年のはうに在處の役を勤
めし生貢茶和らぐあく民とあくとじ事切
あくけれども村人ともかく教へとあくと集うて
あくは男の数がほくと六百六七十人と見え
一と記載する人りをりぬうを明和四年の六月
水のみとひもてあくがこの堤とくと破りて感田村
ト新入村木を流宿柱木村とのかわ村とみとあだ
へ中止と感田村の堤のうちハ水とじらくもく
住居の人へとひもてあくとみとあだとあだ

もくよつて經に著七助取を出さんとく大
庄屋の勘定場りに引く折りへ城下小出で
まふ丈六郎勘次郎西主はひゆは波あり
とひそりてすみじよお取のとつと片付も
ち全く素出でと主人を商ねといきよ
境のやされよう漕つとまは取り破換も見えま
まくまく暗り東のとれもあらわし
ふとつるしげりと取そりと我りおそれハ必破換
といふとまくとまくとせんじにとて被つて
乃出く斗馬ととたけまくぬ明月と本堂深高

乃水小舟にて家へとよりに助め入るよ粥を
煮てくもをうれし人すと經らうとく賃宿をそ
ぞり、世人も彼等奇物のゆうまいよめてくづけ
さうとも酒食とあそびておもひうち折る
近見まことに取次ひ右馬とつても又長百姓
之力とあそびておもひ北人とともひを全く省せり
不珍ひおもひがくとく因と年め七月とつみ
領主より寝相をぬまをう又村内うちに燒ちく
はまうたる油池のまゝ、唯天水のみある源
まく年々とてはあれど旱損の夏へ有ること七
年

さうしてト新入村の祐治峯とソノ娘水りとう溝を
塗はきく小こどりしてさあれまに車がされば
わざうれ地乃木山田北とやくよりとくみうち
あひもほとよけとく上田そとすうねうく後
年老ぬとく庄左内勤を辭せうごく

孝行者歎仙

近河郡薬院村より教育人と歎仙といふ父
忠次ともか務磨郡中益村の産おうしき前く
げ葉浣村うらはモ否て英永元年に病く死せり
その後歎仙も貧窮するがため先朱さる

アリ社に妹のいとつふと奉云ふ出く己もどうし
て母成吉ひー孝也殊可勝也どう歎仙かく
貪くけきむ宮位をめらでとくふと自らにニ常縮
とむれつて入弘門をすたらねあひくを経てくい
多く銀羅せう母好め先も食拘も絶まう經日兩
も水をく或ハ茶とせんじて母に自是へ減て
己もとり小茶を飲まくらむれとお酒もあを飲
とくもゆうことにハ幕子又は始の數を去産にし母
年老て眼あく起居もとく小自由あくまく

己も又かがめのうへなうとまゆをそ殊にまろ成
やうともうよ彼を又人にもくわしくて人を多く
先をすすけく毎に孝吉原むらうとあうきのち
いもと領主の仲間要助といふ者の妻とあうと、七十
歳にあとう男姓日は人ひとあんやうて室の父
母をまぬぐてくありそれぞ家の内和き睦くまよ
故仙もそれはさうじうま住くゆ人眼あるとれども
母先をうそと要助とつてとある要助ハ志すて
父母のあうひよまゆるもまくうかくいそう
孝ひなうしやく彼をうのびひをあうたらく觀る

乃陰平身睦りき故仙の母は七十りゆうみて
病て死しゆゆかゝり後と妹と徳とと母送と
うゆきちうて切に恩を返と教ひくゆくやう
て彼らうげひととくへ出教者もとと領主う
弟と故仙母ゆきへへとの寝英とと見ゆく
安永七年九月

奥節者

家像於大穴村小さんとつぶ金りうりうりとはを
賀郡戸切村の角左衛門娘年十九歳のときと云
大穴村の百姓源兵之妻と云ふたるもあに十年と

經へお詫文中風の病をやうそに行歩ハ家北内
立候と付ひまくしに七十歳よりれる始と九歳より家
に生れるとも居て嫁に入りと彼の病人
の多くは教育せられぬとぬる金のよう見えども
或附親族もしくはいづれもすうて源秀ハく見え
ゆき病年ゆくそれのまゝ次始と稚子のまゝ
にいふけども速と農家内はとせらるゝが
祇渴耳及ぶへされぐらりとあらわに源秀終ふと娘ふ
そくへ見ゆるもとくもとくへへ古事ハ未だ
娘とつまて親里にとくに在候して心のまゝア

おろ安堵ととあと珍人どつひをとむと作の事か
うめか難難の史おいやう始ひとけあまことと
をあんちとみゆくあれとつねる勞苦をなす次
ととばせよとあてまく西とあくとむことくにあら
えきとせきとあくもひきの移りとくちうよ
心を安んじ今更彼はつれふとつるうのうと終
んなどふとくとくとくとくとくとくとくとくとく
ひどうとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
の車ハつとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

又は薪も木もすにあらまつて唯もとくしてアリ
きいていりゆゑと女の力に及ひそく事れまじるに史の
兄弟にともひやう或と迎をやくとのとふすと男
女の業を助けあふるふくして天明元年北毛支の
勇ぬれぬまくをみて千までのあくと其保養の勤と
めしと或と貢物の候はるまでも人ぬむとく
もてすまうに納ちまつて奴族又も村うち北人
くもさう志すアシテ力を全てそらせんまとせ
えりあらうとくとくもあくへ見て你

ゆきやくとアツヘテうけをうそ支の葬送供養の事
あるとまことに經小はるかにアシカシムからゆきと
長女ハラム吉田村へ従助妻ヨリヤモトタキのをセ
ム後女ノモリニモア家と望シムナリケンと
てマラケツヒヤクは従助支姪と我家ヨリジム
耕作の事につづりけども心事く
モリヘヌヘモレと號八千にあらうてお小老實
ヤとやかたの兄弟のひくに志ワヒとまえうと始
ももくまことのまじよりてあてもぬを出まく
きとまことのまじよりてあてもぬを出まく

志はるともと人にて毎代争ひやうむすむをも
かうとつひ生あゆめせ安堵とくつらまし小つう飯至
にきこえられと向と二年八月とつすす事とあく
て寝起一とき

孝行者慈吉

慈吉□郡甚多の柿田若町玉すり桶屋上
から二歳りて母に後妻を奉ひ附父因大罪を
犯して流人とすしは伯父の慈吉舊う名ひ父
うゑく幼稚うて桶屋者乃キ子とありて慈吉
も世を去り往小又伯父弘与大馬う坐ひとそく

ある慈吉人やら人まちと二人の伯父といたる事
いとぬやうが初見う父乃流罪よかどくもを
欲とせふくじゆと一度も罪をあつてひを例よ
あつて書ハゆりまどひねり赦免乃致ともひ
出されとその罪輕うく終りと私願もあひ
さきつとて父を見ゆくと汝傳小波之く
一度と父の名ひとどめさせんとあらまれて經
に至く鴻小波之父に對面せりうその報難乃
も承ソリもとみゆきひもとハもとあに傳う
洋アラ後と又と候主と云ふへせこの心もとは

経日衣とまひとうぬまばくもひと人とそぞうて
安らげ林す。佛事からぬ事もとと場所所
一日を親を岩もめぬる人のたまあらうとあ
直夜とつらまめにあらうめきかくて天明元年
領主は法事のまへ附罪人を定むるの沙汰あり
あり。慈吉と父ろとが數少しくと神社すも
頼ひし。其時をゆこ父の教よりきて御よろ
を拵すたへくとさり小流域とさり父の岩
ひと終んじてまるとおひ坐んともあらうと
いつ領主はさればえをれと天明四年とつるす

固六う流罪をゆだして家にゆく。先慈吉の預を
ちを遙させなきうつて候う父につくも。すこ
よからく。あねタヒ食わとあもゆくゆく
きくとれりひの實へととととおもすつよく赤
巻あけりうきと。天明年の十一月某とゆきて
寝矣。

孝行者きた

とくハ宗像郡本村の百姓友七娘をう愛せひま
この脚氣の病ありて多くは相手ぬ。居るふと組
文乃正助と人を老ぬとてゆくもとすれいとあく

して耕作を勤め程年一町あきうれ田畠をそりち
やううい波せをつまみあつやくも正賜ち天の印
せうすよ病て死へぬを附ふとハ十四歳ハ十七才を
よりはる氣うつて力とひきせらる耕作をさけ
しは田畠アキアツモソヒメ祖父の付せよおとくは
或は婦の氣に雷せく才年あまうもよやく
さく小療治と加へられへ重うくに癒ゆると
其身やよくうつて農家内はうたもあくと
程よこゝと獨りも作業よ力をそくへ贅貌を
ねりと田島と肥ほ沼澤のむきとおまくらう乃

事人に渡せを中もと田地の仕づま田乃すれぐく
やくぬ女の力に及ばざれ程内年ハ逃れつゆれば男ふ
を頼みてのまち山林の薺を伐さまくとひ
まくもせぞくうけるちぬか木村乃貢地ハ田那福弓
浦とつぶぬまく牛馬につち出しこれ浦うち船代
金とひく福弓城下に送るするうきこのをなを
福弓とぬあひてがねうそ一里半程の送たうしうそ
たと自らに二度つげきうひ或ち胡てんじ田浦と
てナニニ町も、りまくたう畑の大根とひと父母の起
まくもくうらわ花流本達ひくとくにうぬ貢物

をはありてしもと父乃とふるやめの時を
津金傍浦とつむふの醫者とたのくましにそも
一里半もかとひ道うりしどと松葉をこひあらひと
ひひよ行かうてそもとく外絕きのれどて
も更よソ林さうりまゆと鳥のいづぬわゆの父
耕作母出盛と隣村すく小往來やう日書てぬ
うまれきたハ松ぬを焼して延ひにゆきぬ病
用小費多くとくつのく葉巻巻煙轆をたく繩
儀とあくまくして葉細工をくどり又大活ひと
ひ死ぬよううれ福ろに櫻炭とりふねと牛よつけ

送りもの秋便とうあく父の好物る念みをうへ
ぬくをひそめうれはつれとめねあくハ母乃
うとせ車ふとをたとすうとくほどうの稚ふ
をとめ風俗日ううしどと姉と同居乃津丸村の
にあう家よまえや小うれきよくもあくせうは
とおとあうめうれと主入もとたり孝んとせ
及ひ彼年いとまどくせその勞苦をつまゆく孝
苦ととちまことうとせをそぐくせつひる
けう領主にまえをかく天明八年正月某をら
そへてその孝行と褒めせり

忠義者次右馬

次右馬ハ早良郡西新町ナリトムニ御座加三瀬ウト
教ナリ年二十三シテモ御子ノ名未滿祖父芳
水と云者よつて人にもられて眞實ナリ
ナは芳水もまた死んで御母ナリハアヘリ芳
水と明和元年と云うて病て死セラトム病中ハ
そのみ化を失ヒキテ久夜と云ふて必抱母
心とモモヒシ芳水ナリヒのうと家内法モ次
右馬と枕ノ上抱き汝まどうせ志勤乃ミナリシ
テ病ナリテ後より双抱乃深切ナリシ脱志

美利通ノ子也成ニシムト作右馬母力を添く由
作右馬も又彼をと爲うし思ふ事ナリ次かど之
のうてうせゆくハ主従乃ちもひも睦くサヌ
多おち作右馬う妻病くうとめば時加三瀬トムホ
ニ歳ナリ乳にまよと割絆ナリ疮瘻をふやシ
シモササル、痛重ナリシ程小作右馬う銀盆いもん
シモササル、家業志あくして唯法右馬う双抱
をモのうに醫薬のうちシテ及モ次神ヨリ
佛小らヒカと云して我ふを益ねナリシナリ
作右馬ハ貌工に肥く着化ナリたちまちひひ

あくらうそりけをと足洗ひ履もと杖もとするやまと
もみみ次右馬（よまた）とけらとをぬよけはる背
おきぬらとあくふり安永へまどくうやさく
小恭公房（こぎやうぶ）ハ年十二歳比初稚りてぞれものなむ
りとまんざい次右馬（よまた）をうそしゆう爲めのすを
うけをと直候（ただま）とねく双抱よひをまぢうとが志
るゝもあして向き年比多ひたゞくもうぬ志はる
日雅（ひめい）とあ云房（いづら）をたる祖母佐助右馬（さすけうま）後乃妻日つ
くく葉代男（はだおとこ）みのまにへそまく風と親族もかけ
きと後乃事も見えぬたゞうつ只次右馬（よまた）をめら

じりのあ葬礼佛事などの手紙とも多くとくせんくわ
きては家業も底うくじ裏へもれちひもとだらう
ゆとく祖母次右馬（よまた）ハ雅と加多房（かたふさ）を傳へく称す
塗物をあつべへんとお家にゆき不幸の事ると
つまにうづくとゆきをまくとくとくわくと
とく小町つぐれ多くと云葉代をとせと祖ふく
家業を娘ひきまちやうくにいもとありかの後妻ハ
娘姑の際睦（くわいもく）とせらととあ男ふくら小取里（おとりさと）と
みくとく祖母をとくにうづくとあ男ふくら小取里（おとりさと）と
あうし経よも家職（かしょく）ととくは朝夕代食事

卷之二

卷之三

人ごちうらともかく　桂日今を次右馬うる勞若も爲ふて
みえり　次左馬う父もときの弟ども志摩郡野北村乃
百姓ううふとくあまくもくさつあめれうもひあ
いもくもあ波せとくらむがゆくわくよ毛比の田
畠を質に、とおはなづかまなふふうく次うんぬ
きふとくに男と女男と八角く初うくとくもく
くもく化とりふすふくて月日を送り居りて文
乃きのふもやく人とたうれどかの質地ともくく
うけえく二男にあえて耕をとるべ支婦ハ四男
を生む因努乃呼吉村日うつ又往化しもを成

りゆうしを次有馬へ居そとのほどうより完地をおお
あらた年家作つみくらも父母にあくえてうはす
往せ因くれどり費を省みて米穀少ふと衣服浅
送り借銀ふとまとも僕へ取つぬき者うれハ先
生の蔭を又睦しくちもくと私を死もひともも
もあらやう又人の銀難とぞもあらとせんゑす
付まちの後次アミ庵トシとみれも必杖をあえ
くとそよ化粧懸り行ひ多きしう大風うばた
くひちうきちあに次有馬二代乃主人につく
ちく天明八年に至るまでとく太九郎也

高ひく只家内業の多くすありもひれすよまう
まく心を至く承き傍う銀難とぞもくとくとく
領主に見えあれども承候あゆく慶矣せう

孝行者庄吉

庄吉は鞍手郡上板野村の百姓也て二段ハ畠山半弓
乃田島をりて母につくく孝養重く時も内
耕作すも母のそぐへにほの植けもせむくろ
あく前とろとれと生ふ事もまづうる敷
ととじく車かくもうちを承不用ひもとくら
ぬうやうくふとじく出しそと母代而よいちもも

生所、まごを生うやじ事すくして生うけと生産
すと水めかくらとくのく女のひとやねつそくとり
勧とくも家あとく貪く夜具ともおさき古
えむ母にのく板帳を用か冬と食りゆう老と母を
どうぞとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
火して生暑を凌ぎうまいよもやがふや
て身のゆるまくも自由あくまくしとわくとくとくと
脇うまなくたく幸りじの心をゆくゆくとくとくとくと
の九十にあきうて中國をやうじいをのどり跡を又
六十アリヤリとくは其ふ乃久吉庄右衛門とソノふ

兄すみりおも父せ參ひよもひくを教とうけ守
お文をま手けて女抱せきやくに寛政元年四六月
領主うる龜とく比美とそぞくせりる

風俗宣者忠右衛門

風俗宣者若太郎

風俗宣者徳七

風俗宣者源次郎

風俗宣者忠百姓

宗像郡宮司村と其高六十二町一陇八畝二十六歩の所
ある庄屋と忠右衛門と徳七と源次郎

郊とをひそむ村うちの風俗す
て患者多つ云々とありトヨモ二十七年あると組改あ
りテあをとよとくそれと組改もゆく村うちの教
被ふる爲ヨリとつゝか國恩をうけまじ法度と忌
き不時ひと役とくも他村アミルレツテ兵士々
ちお宮司村と海浪よりて多くは砂浜ノアシ便ヒ
チヨリ耕くともひらびらと面白にあ角トヤマヒ
シミタリちつ緒もひよハ村アミルモテツ度と承く
男あるとさうほくへ蟻のアキアキ多されどもあ
財をたゞへ油と流しとくもて農業にむかひ居る

のとくに米穀のうちがよく麦島ふとむかしの砂地
もてちよう教ほひまくは草と湖とみどりの夜と
城きに出く蓆ともどもこれ味を肥して化を
見てはあらず出で村よりもえ田麦もとそひく
あそび来りてとひゆきと村役人の妻
ふともとめ種の菜細工をひもみ村うちすらち
菜地をあらわす村よりとじうまわに
力をそそぐよ経け僕約とはくわくへつうきて
丈食乃鷹ゆゑあて彼うな屋をしが田畠

六事とつては國中稻虫の多にうるを海毛乃村も
を貢を減しゆる者と領主より銀やトモリウツ
シテ村へ主領ひよもりし者も又窮民助
合とつ法とく病或ハ災にうるて盗賊田免を
うる者あれと親族をすよ及ぼすりうる者の老少
が行法となりあ賜けをとる村人の難散をとらこ
そはふうつきは村うち代役田がどり石は只天水
のとたれてもじううと早損あらきへ多めうる
も自己の差出在地の領ひよととせうる代役
行ひよ天免とくくくんを免あしたまはとつ見

若きともまへんとあるゆふとくものニカ殿
ノアレとつりゆと村うち公力に及ひゆうとくに
忠ちかへ我一村内をうへなれ、余志の力をうれふ
にあく次ニ田まわらひぬ事うとくくへ年あくく
とく年く農事代りてゐてふと土歳うの童を
もく先てむかくおこもくせしに凡二ふ六
百人あまうとく力とて兎をやうくにまづとて小
寛政元年の苗代とて水代のたうく柱はもろ
もくもくとくやふ村くまをされ入とひる
は生れやうう天和二年う四百人にまくら人別

おこしよどにひきよひ小家数增加して今へ當
せり人あゆつもあらしきは領主よりおどり本と
のへた在組改めたり無事したるときあま
寛政二年の事なり

孝行者もん

もんを秋月の堺下町もとより大工と布う焉う
ひまれつてぬかるやうすみうせう比地役役りも
人のうちへとつとえむと老きも始めて至
年くねく孝行とまじふる慈母の嬰兒を生ひ
うてはそんに暮食くされまじめむりとふくらむ

おとせねむひおけとく食ぬとまじつ始の
がまとまくへ心念えうるまく日くにむ地のあう
あらすとおふかくに承抱へくらあら財めれと
こととくを後ち組母りやめくらあ親里うる吉被
と被うへくらうれ始半身を濡ますらる者
内うとう病とあづみあく次夜うらむをあと
見ゆるもおとづれとくとくと入浴するもくと
かく病のうちふくら病とて始の腰アヒキ半身
でもとも藤原はつは久ハ火箱こつすのよ火成

埋めて姑のまことにうそと見取らぬとかけども
今さら風と云ふとあつそのほんが門をよきも
ておきの者のまわり母と夫めやうく含ねゆる
そせたとあへぬ生ふとみれあらゆる
もぐれうちとつけあはれておもをとけまゆき
薬と薬すらもまぐらむく山林の薬草などわらひ
うれし彼のゆくもの種を皆も苦とゆりゆ
うき冬も火を消して元始よとこう居てくに
そんじとくわくうなまくおまかせよせぬ火
おはあくう活けると元始よあるも重りうへゆく

是れもうとては小父と禁つきてあくらとくら姑の
酒を呑うとはふ市日おとこ一職業の入るよみどり
東うてもくらう年老くもくは氣色みをく
くとあをのと下戸あたへがとすれやうに
へくと飲ひをきつけまつゝ一頃をくらへ
いあけきと明和八年の四月某をとらせる無事

ちう

孝行者祐兵郎

徳文部ハ秋月乃城下今小路町口をうね仁助とすが
仁助と至爾とあこよびてとふ食へ見者多す

ノニ一歳す無く九人と至りあひはほく年僅を命ハ
父の貧苦をもるに志のひと七年の秋のうちは
モシタコトは医廢を心地れどもやうに暮すやう
のあ成つて嘗て毛多とワタスとよく
モシタコトは毛多とお暮りくせばせまつて毎日医廢
を望むと見しよ極め病へてかゝりゆく思ひ
往々くはまくと毛多と毛多と父にすえ
毛多と毛多と毛多と毛多と毛多と毛多と毛多と
毛多と毛多と毛多と毛多と毛多と毛多と毛多と
用わらうて母に毛多と毛多と毛多と毛多と毛多と

七月領主より毛多と毛多と毛多と毛多と毛多と毛多

卷之四

孝義錄卷之四十四

6年 月

6年 月

